『天草版平家物語』考（3）

市　井　外喜子

A Study of "Amakusaban-Heike-Monogatari"（3）

Tokiko Ichii

Ⅰ　はじめに

古典平家物語（『平家物語』諸本の代表として，国会本：新潮日本古典集成『平家物語』水原一校注）と，天草版平家物語（『天草版平家物語対照本文及び総索引』江口正弘著　明治書院）との構成比較を試みたい。

これまでに三度このような意図のもとに，報告を行なってきている。

最初は『天草版平家物語』考，大東文化大学紀要　人文科学　第38号　平成12年３月のものである。天草版平家物語巻第一（全12章段）の構成を，古典平家（代表として岩波書店刊　新日本古典文学大系『平家物語』梶原正昭・山下宏明校注：高野本）巻第一～巻第三と比較し，その構成上の特徴を報告した。

続いて，自著『天草版平家物語私考』(新典社　平成12年12月）では，天草版平家物語巻第一に，巻第二（全10章段）を加えて，古典平家（高野本：新日本古典文学大系『平家物語』，斯道文庫本：『百二十句本平家物語』汲古書院，国会本：新潮日本古典集成『平家物語』）巻第四・巻第五と比較を行ない，その構成上の特徴を報告した。

さらに『天草版平家物語』考（２），大東文化大学紀要　人文科学　第40号　平成14年３月では，天草版平家物語巻第三（全13章段）の第一章段（木曾殿の由来と，平家に対して謀叛ををこされ，平家の味方の長茂と合戦してうち勝たれたこと）のみをとりあげ，古典平家（国会本：新潮日本古典集成『平家物語』）巻第六との構成比較を吟味し，その結果を報告した。

今回は，天草版平家物語巻第三（全13章段）の構成を，古典平家（国会本：新潮日本古典集成『平家物語』）巻第六～巻第八と比較し，その構成上の特徴を報告したい。

巻第三（全13章段）の構成比較を行なう前に，巻第一・巻第二の観察結果を簡潔に記しておきたい。

最初に巻第一・巻第二の古典平家との対校表を示す。天草版平家巻第一は，古典平家巻第一か

ら巻第三までとの対校表である。巻第二は，古典平家巻第四・巻第五との対校表である。両平家の構成特徴が把握できるように，登載章段名の有無を明らかにした作表である。天草版平家の内容と僅かに拘わりを持つ古典平家の章段名をも登載章段としてとりあげている。したがってこの対校表は，天草版平家と古典平家の構成特徴を端的に示すものといえる。今回の報告，巻第三（全13章段）の観察においても，このような対校表を作成するところから始めることになる。

天草版平家巻第一（全12章段）と古典平家（巻第一～巻第三）との対校表は，次のようになる。

天草版平家巻第一	古典平家（高野本）		備　考
	登載章段名	不登載章段名	
第　一	祇園精舎		巻第一
	殿上闇討		
	鱸		
	禿髪		
	吾身栄花		
		祇王	天草版平家では巻第二・第一章段へ移行
		二代后	
		額打論	
		清水寺炎上	
		東宮立	
第　二	殿下乗合		
第　三	鹿谷		
	俊寛沙汰　鵜川軍		
		願立	
		御興振	
		内裏炎上	
		座主流	巻第二
		一行阿闍梨之沙汰	
	西光被斬		
	小教訓（前半）		
第　四	小教訓		
第　五	少将乞請		
第　六	教訓状		
	烽火之沙汰		
第　七	大納言流罪		
	阿古屋之松		
第　八	大納言死去		
		徳大寺厳島詣	
		山門滅亡　堂衆合戦	
		山門滅亡	
		善光寺炎上	
	康頼祝言（前半数行）		
第　九	康頼祝言		
	卒都婆流		
	蘇武		
第　十	赦文		巻第三
	足摺		

第十一	御産		
		公卿揃	
		大塔建立	
		頼豪	
	少将都帰		
第十二	有王		
	僧都死去		
		颰	
		医師問答	
		無文	
		灯炉之沙汰	
		金渡	
		法印問答	
		大臣流罪	
		行隆之沙汰	
		法皇被流	
		城南之離宮	

天草版平家巻第二（全10章段）と古典平家（巻第四・巻第五）との対校表は，次のようになる。

天草版平家巻第二	古典平家（高野本）		備　考
	登載章段名	不登載章段名	
第　一	祇王		巻第一
		厳島御幸	巻第四
		環御	
		源氏揃	
第　二	鼬之沙汰		
	信連		
	競（前半13行まで）		
第　三	競		
第　四	山門牒状		
	南都牒状		
	永僉議		
	大衆揃（前半）		
第　五	大衆揃		
	橋合戦（前半）		
第　六	橋合戦		
	宮御最期（前半）		
第　七	宮御最期		
		通乗之沙汰	
第　八	鵺		
		三井寺炎上	
		都遷	巻第五
		月見	
		物怪之沙汰	
		早馬	
		朝敵揃	

		咸陽宮	
第　九	文学荒行		
		勧進帳	
		文学被流	
	福原院宣		
	富士川（前半）		
第　十	富士川		
	五節之沙汰		
	都帰		
		奈良炎上	

○高野本・期道文庫本・国会本との対校表

天草版平家巻第二	古典平家		
	高野本	斯道文庫本	国会本
第　一	祇王	第３句　義王	第５句　義王
		第４句　義王出家	第６句　義王出家
第　二	鼬之沙汰	33句　信連合戦	第33句　信連合戦
	信連	34句　競	第34句　競
	競		
第　三	競	34句　競	第34句　競
第　四	山門牒状	35句　牒状	第35句　牒状
	南都牒状	36句　三井寺大衆揃	第36句　三井寺大衆揃ひ
	永僉議		
	大衆揃		
第　五	大衆揃	37句　橋合戦	第37句　橋合戦
	橋合戦		
第　六	橋合戦	38句　頼政最期	第38句　頼政最期
	宮御最期		
第　七	宮御最期	39句　高倉宮最後	第39句　高倉の宮最後
	若宮出家		
第　八	鵺	40句　鵺	第40句　鵺
第　九	文学荒行	46句　文学	第46句　文学
	福原院宣	47句　平家関東下向	第47句　平家関東下向
	富士川		第48句　富士川
第　十	富士川	48句　富士川	第48句　富士川
	五節之沙汰	49句　五節沙汰	第49句　五節の沙汰
	都帰		

上記の対校表から天草版平家物語各巻に共通する観察諸点を，次の３点に絞ることができる。

A．天草版平家は古典平家の内容をそのままに持ちこんではいない（古典平家の各章段と１対１の関係を持っているわけではない）

B．登載章段の内容（いくつかの章段が連続的に不登載）

C．不登載章段の内容（天草版平家から排除された章段の共通性）

これらＡ～Ｃの観察点に立って『天草版平家物語』巻第一の構成・注目点の要旨を箇条書きとして記しておくことにする。

１．天草版平家には，古典平家（読み本系・語り本系ともに）の総序とも言うべき「祇園精舎」冒頭「祇園精舎の鐘の声，諸行無常の響きあり。婆羅双樹の花の色，盛者必衰のことはりをあらはす。」が削除されている。異教である仏教的な視点からではなく「をごりをきわめ，人をも人と思わぬようなるもの」としての清盛の「行儀の不法なことをのせたもの」として，『天草版平家物語』を語ろうとしている。

２．巻第一の冒頭：平家の先祖の系図（祇園精舎・殿上闇討），また忠盛の上のほまれ（殿上闇討・鱸）と，清盛の威勢栄華（禿髪・吾身栄花）のこと　には，古典平家から５章段分をとりこんでいる。：Ａ

３．登載章段をみることによって『天草版平家物語』巻第一の構成が，明確に得られる。巻第一は，全体を３区分仕立てにしている。

○第１区分（第一章段のみ）は，清盛の先祖歴代の大要を語り，忠盛昇殿から清盛をはじめとする平家一門の威勢繁栄を語る。

○第２区分（第二章段のみ）は，摂政基房の車ともめ事を起こした清盛の孫，資盛をめぐる平家悪行の始めを語る。（殿下乗合）

○第３区分（第三章段～第十二章段までの10章段）は，「鹿谷」事件を語る。（藤原成親等による平家打倒の策が失敗し，その顚末・後日譚まで）

○『天草版平家物語』を抄訳した日本人イルマン，不干ハビヤンの編纂姿勢が明白に窺われる。古典平家の各章段から万遍なく取りいれるのではなく，「殿下乗合」・「鹿谷」事件に焦点を絞り，他の内容は排除している。：Ｂ

４．不登載章段の内容からは，直接平家の物語に拘わりを持たない古典平家の章段群が持つ内容が，浮かび上がってくる。それは清盛全盛期に現出した歴史的な大事件群（一連の山門騒動など）である。『天草版平家物語』ではこれらの事件を割愛したために，古典平家にみられるような混乱・不統一がない。天草版平家では，「鹿谷」事件の連続性が保たれ，主要人物の大納言成親・法勝寺執行俊寛らの像が，鮮明に結ばれる。：Ｃ

○このことは外国人宣教師の日本語テキスト『天草版平家物語』に一貫性を与え，内容把握を容易にする利点も兼ね備えることになる。

５．「祇王」章段の移行（高野本では「吾身栄花」に続く「祇王」章段が，天草版平家では巻第二第一章段へ移行）が，注目される。：Ｄ

続いて前記の対校表から観察される『天草版平家物語』巻第二の構成・注目点の要旨を箇条書きとして記しておくことにする。

１．登載章段をみることによって『天草版平家物語』巻第二の構成が，明確に得られる。巻第二は，全体を３区分仕立てにしている。

○第１区分（第一章段のみ：D「祇王」章段）は，不干ハビヤンの意図的な配置によって，巻第二冒頭に置かれたものである。清盛の「fuxiguina coto のみをせられてござる」とする結末を語る。

○第２区分（第二章段～第八章段：E「高倉宮以仁王」の事件）は，高倉宮以仁王が，源三位頼政にすすめられて企てた平家打倒の顚末を語る。

○清盛に対する私憤から出家する祇王；宗盛に対する私憤から高倉宮以仁王に対して「なましひに私には企られず，宮をすすめ参らせ」て謀叛を企てた頼政，この親子（清盛・宗盛）の「fuxiguina coto」が，平家衰亡の前兆となることを語るのが，祇王・高倉宮以仁王の事件の主題目である。

○第３区分（第九・第十の２章段：F「源頼朝」の挙兵）は，源頼朝の挙兵から，富士川における源平両軍の合戦と平家軍の敗北，近江の国へ発行までが語られる。

○巻第一の最終末尾には，平家の衰亡の因を，巻第二の最終末尾には，平家衰亡の前兆を語りおえている。：B

２．古典平家から，天草版平家への不登載章段の内容を示す。不登載章段をみることによって，『天草版平家物語』巻第二の性格が理解できる。

①厳島御幸・還御・源氏揃・通乗之沙汰・三井寺炎上：「高倉宮」事件に直接拘わりを持たない章段。

②都遷・月見・物怪之沙汰（都遷群）：清盛が福原遷都を断行したことを主題として，それに拘わる貴族の郷愁・様々な怪異など。

③早馬・朝敵揃・咸陽宮（早馬群）：頼朝の挙兵に関連して語られる説話。

④勧進帳・文学被流（文学群）：文学像を語る説話等。

⑤奈良炎上：平氏―興福寺・東大寺との抗争を語る「奈良炎上」は，「三井寺炎上」（平氏―園城寺の抗争）と同じく不登載章段。巻第一で「清水寺炎上」・「善光寺炎上」が排除されているのと同様である。：C

３．天草版平家巻第二の依拠本を注目するために作成したのが，2つの対校表である。「高野本」（覚一本）に比して，百二十句本の「斯道文庫本」（漢字・片仮名交り本）・「国会本」（平仮名本）との関連性の深さは，一目瞭然である。

Ⅱ　天草版平家物語巻第三の構成

これまで天草版平家物語巻第一・巻第二の構成特徴を簡潔に述べてきた。

巻第三の構成を述べるに際しても，巻第一・巻第二の比較手順と同じく古典平家との対校表を作成し，その観察を行なうことによって，巻第三の構成特徴を見ることにする。なお巻第二の構成特徴を見た際に，「高野本（覚一本）」に比して百二十句本「斯道文庫本」・「国会本」との関連性の深さを明示した。したがって巻第三の古典平家との対校表は，「国会本」に依ることにする。

（斯道文庫本は，巻第八が欠本である。）

（1）古典平家との対校表

対校表を示す前に，天草版平家物語巻第三（全13章段）の表題を載せることにする。

第一　木曾殿の由来と，平家に対して謀叛ををこされ，平家の味方の長茂と合戦してうち勝たれたこと

第二　平家木曾をほろぼさうとして，北国え下られるばそのうち木曾と，頼朝不和の事があったれども，ついに和睦せられたこと：また木曾殿が火打城にをかれた斎明威儀師謀叛を起し，平家の味方してその城をとらせたこと

第三　木曾も，平家もたがいに方々え人数くばりをしたことと，同じく倶利伽羅が谷で合戦して，平家を残り少なにうちなし，また志保坂の合戦にも木曾うち勝ったこと

第四　篠原の合戦にも平家負けられたこと：並びに実盛が討死してその鬚を洗われたこと

第五　木曾軍の評定をして比叡の山を語らわるれば，すなわち比叡の山も木曾にくみし，平家をそむいたこと：並びに平家西国の合戦にわ勝利を得られたこと

第六　木曾諸方から都え入ると聞いて，平家わ主上をも法皇をもとり奉って，西国え落ちょうとせらるる時，法皇いづちともなく失せさせられたことと：同じく平家の都落ちと，また忠度の歌の沙汰

第七　維盛の落ちらるれば，北の方をはじめ，子たちの維盛を慕われたこと

第八　平家の一門わ都を落ちらるるそのうちに池の大納言殿わ都にとどまられたこと：同じく福原を立たるるとて，一門の人々名残を惜しまれたこと

第九　法皇鞍馬の寺から比叡の山え還御あったことと，平家の西国え落ちられてからのこと

第十　院宣によって豊後の緒方平家に対し謀叛を起すによって，平家あつかわるれどもかなわず：ついに大宰の府にもえたまられいで，かちはだしで落ちさまよわれたことと，屋島の内裏づくりのこと

第十一　木曾が猫間殿に会うての無躾と，車に乗って牛にひきづられたこと

第十二　平家室山，水島二箇所の合戦にうち勝たれたことと，兼康が木曾に対しての謀叛と，源氏の大将行家の合戦のこと

第十三　木曾都にをいて狼藉をなすを法皇からして戒めさせられたれば，法皇のござる法住寺殿まで押し寄せて，合戦をし，御所を焼いたこと

さて以下に示すのが天草版平家巻第三と，古典平家（国会本：巻第六～巻第八）との対校表である。この対校表は両平家物語の構成特徴の把握が容易なように，登載章段名の有無を明らかにした作表である。天草版平家の内容と僅かに拘わりを持つ古典平家の章段名をも登載章段としてとりあげた。

天草版平家物語巻第三（全13章段）と古典平家（巻第六～巻第八）との対校表は，次のように

なる。この対校表をもとにして，天草版平家と古典平家（国会本）の構成をみることにする。

天草版平家巻第三	古典平家（国立国会図書館蔵本）		備　考
	登載章段名	不登載章段名	
第　一		第51句　高倉の院崩御	巻第六
		第52句　紅葉の巻	
		第53句　葵の女御	
	第54句　義仲謀叛		
		第55句　入道死去	
		第56句　祇園の女御	
		第57句　邦綱死去	
		第58句　須俣川	
		第59句　城の四郎頓死	
	第60句　城の四郎官途		
第　二	第61句　平家北国下向		巻第七
	第62句　火打合戦		
第　三	第63句　木曾の願書		
第　四	第64句　実盛		
第　五	第65句　玄昉の沙汰		
	第66句　義仲山門牒状		
	第67句　平家の一門願書		
第　六	第68句　法皇鞍馬落ち		
第　七	第69句　維盛都落ち		
第　八	第70句　平家一門都落ち		
第　九	第71句　四の宮即位		巻第八
	第72句　宇佐詣で		
	第73句　緒環		
第　十	第74句　柳が浦落ち		
		第75句　頼朝院宣申	
第十一	第76句　木曾猫間の対面		
第十二	第77句　水島合戦		
	第78句　瀬尾最後		
第十三	第79句　法住寺合戦		
	第80句　義経熱田の陣		

さらに登載章段の記述内容の登載有無を国会本の小題目（小見出し）にしたがって示してみると，以下のようになる。

	登載小題目	不登載小題目	天草版平家巻第三
第54句 義仲謀叛	義仲幼少の事		第一
	義仲旗あげ		
		城の太郎受領	
		石川城落去	
	宇佐の大宮司飛脚		

第60句 城の四郎官途	城の四郎信濃の国発向 井上の九郎武略の事 城の四郎戦に利を失ふ事 京中の平家油断の事		
第61句 平家北国下向	鳥羽の院朝覲の行幸の例 頼朝義仲和融の事 木曾と城の四郎と合戦の事 北国追討の評定	経正竹生島参詣	第二
第62句 火打合戦	火打が城 平泉寺の長吏心がはり 火打が城落去		
	平家砥波志保坂の陣 木曾埴生の陣		第三
第63句 木曾の願書	埴生八幡 平家と木曾と合戦 平家砥波志保坂落去	覚明素生 願書 鳩の沙汰	
第64句 実盛	平家篠原落ち 武蔵三郎左衛門有国討死 斎藤別当実盛討死 首実検 実盛錦直垂の事		第四
第65句 玄昉の沙汰	平家大敗の論 飛驒守景家思ひ死の事	伊勢行幸 大宰少弐広嗣の乱　観音寺供養 兵乱の祈禱の事	第五
第66句 義仲山門牒状	木曾越前の国府にて合戦の評議 覚明牒状の事 山門衆徒の僉議 返牒の事		
第67句 平家の一門願書	平家山門衆徒計策の事 平家平生神慮を背く事　衆徒平家を許容せざる事	願書したためつかはす事	

第68句 法皇鞍馬落ち	平家宇治瀬田の手退散の事 西国行幸のはかりごと 法皇法住寺御所を脱出 主上都落ち 薩摩守・俊成の卿対面の事 千載集の沙汰	春日大明神童子姿と現じ給ふ事	第六
第69句 維盛都落ち	維盛北の方哀別の事 若君姫君哀別の事 斎藤五・斎藤六哀別の事	経正御室へ参らるる事 青山の沙汰	第七
第70句 平家一門都落ち	平家一門家々放火の事 池の大納言心がはりの事 畠山・小山田の事 小松殿公達遅参 都落ちの人々 肥後守貞能振舞の事 和歌述懐 福原旧都一宿の事 福原落ち		第八
第71句 四の宮即位	鞍馬より山門へ御幸の事 同じく還御の事 四の宮位定め 義仲行家官途の事 平家大宰府へ下着 四の宮即位		第九
第72句 宇佐詣で	時忠の卿還俗国王の沙汰	惟高惟仁位争ひ 祈禱の事同じく競馬の事 名虎相撲の事 伊勢公卿勅使 宇佐行幸	
第73句 緒環	九月十三夜述懐		
	頼経脚力の事 緒方の三郎追立て使の事 筑後の国竹野城合戦 大宰府落ち	あかがり大太	第十
第74句 柳が浦落ち	清経入水 四国わたりの事　屋島やかたの事 海上仮屋の事	柳が浦内裏の事	

第76句 木曾猫間の対面	猫間の中納言殿入御 食をすすむる事 返礼として出仕の事 車のうち振舞の事		第十一
第77句 水島合戦	足利矢田の判官山陽道下向 水島陣 能登殿船軍下知 矢田の判官船乗り沈むる事		第十二
第78句 瀬尾最後	瀬尾帰心 倉光寝刺しの事 笹の畷城攻めの事 同じく板倉の城の事 瀬尾父子郎等最後 義仲行家確執 室山合戦		
第79句 法住寺合戦	源氏洛中狼藉 鼓判宮の沙汰 法皇義仲合戦の支度 鼓判官院方下知 法住寺焼討 法皇主上捕はれ 首実検	明雲僧正討死 仲兼馬かへ 信濃の次郎討死 刑部卿三位剝がれ 脩範にはか出家	第十三
第80句 義経熱田の陣	義仲悪行		巻第三了
		公卿・時成熱田下向 同じく鎌倉へ参着 鼓判官鎌倉参上 義仲平家和議ならず 義仲大赦行はるる事	巻第四・第一章段へ移行

上記の対校表から観察される天草版平家巻第三（全13章段）の主題は，次の２点となる。

G　木曾義仲の動向

H　平家一門の動向

（２）対校表の観察

天草版平家巻第一の視点にあわせ，巻第三においても次の３点から観察を行なうことにする。

A．天草版平家は古典平家の内容をそのままに持ちこんではいない（古典平家の各章段と１対１の関係を持っているわけではない）

B．登載章段の内容（いくつかの章段が連続して不登載）

C．不登載章段の内容（天草版平家から排除された章段の共通性）

これらＡ～Ｃの３観察点について述べてみたい。まずＡの観察から行なうことにする。

A．天草版平家は古典平家の内容をそのままに持ちこんではいない（古典平家の各章段と１対１の関係を持っているわけではない）

対校表をみると，天草版平家の一つの章段内に，古典平家から最も多くの登載章段をとりこんでいるのが第五（木曾軍の評定をして比叡の山を語らわるれば，すなわち比叡の山も木曾にくみし，平家をそむいたこと：並びに平家西国の合戦にわ勝利を得られたこと）である。国会本から４章段分の内容をとりこんで，天草版平家の一章段（第五）をなしている。この天草版平家巻第三・第五章段を例としてとりあげ，古典平家から天草版平家への抄訳（古典平家の各章段と１対１の関係を持っているわけではない）の様子をみてみたい。

さて第五章段の，聞き手兼進行役をつとめる右馬の允（VM.）と，話し手の喜一検校（QI.）の語り出し，その後の展開は次のようになる。

VM. 平家はその分にして京え上られてあったか？

QI. そのをことぢゃ，平家わ北国えくだられた時わ，十万余騎と聞こえたが，上らるる時わ，わづかに三万ばかりになって，さしも結構に出立って都を出られた人々が，いたづらに名をのみ残いて越路の末の塵となられたことわ，まことにあわれなことでござる。

と語り始める内容は，国会本第65句玄昉の沙汰冒頭小題目，平家大敗の論に相当する。続いて小題目　飛驒守景家思ひ死の事が語られる。しかし，伊勢行幸，大宰少弐広嗣の乱，観音寺供養，兵乱の祈禱等，直接に拘わりを持たないものは割愛される。

次には第66句義仲山門牒状の内容が続く。小題目　木曾越前の国府にて合戦の評議　覚明牒状の事　山門衆徒の僉議　返牒の事等，すべてがとりこまれている。注目すべきは，牒状の内容要約である。

○天草版（牒状の前後を含めて記す）覚明に書かせて，山門え状を送られた。その文体わまづ平家の悪行を書いて，これをしづめうずるために，上洛することなれば，山門も源氏え一味せられいかしと書かれた。

国会本覚明の牒状は，次のようである。

○義仲つらつら平家の悪行を見るに，保元・平治よりこのかた，長く人臣の礼を失ふ。しかりといへども，貴賤手をつかね，緇素足をいただく。ほしいままに帝位を進退し，あくまで国郡を虜掠す。

とはじまる，総字数約1232字の牒状である。天草版では前述のように49字にまとめあげられて

いる。

また山門からの返牒も，国会本では次のようにはじまり，総字数約616字の内容である。天草版平家では31字ばかりに要約されている。

○国会本　六月十一日の牒状，同じき十六日到来。披閲のところに数日の鬱念一時に解散す。およそ平家の悪行累年に及んで，朝廷の騒動止む時なし。

○天草版（牒状の前後を含めて記す）やがて返札を送った。その趣わ，これも同じやうに平家の悪行をそしって，また木曾をばほめて一味しようずると返事をしたに：

さらに続けてQI.が語るのは，第67句平家の一門願書である。小題目にしたがって，平家山門の衆徒計策の事　平家平生神慮を背く事　衆徒平家を許容せざる事と続くが，願書したためつかはす事は，省略されている。平家がしたためた願書は総字数924字ほどであり，その冒頭は次の如くである。

○国会本　敬白　延暦寺をもって，帰依して氏寺と准じ，日吉の社をもって，尊敬して氏社のごとくにす。一向天台の仏法を仰ぐべき事。

天草版平家の様子を，その前後をあわせて記すと，次のようである。

○天草版　一門の公卿同心して願書を書いて，比叡の山え送って，三千の衆徒に力を合わせいと頼まれたれども，年来日ごろの振舞がそでなかったによって，祈れども，かなわず，語らえども，靡かず：

と小題目願書したためつかはす事の内容は割愛されている。

最後にQI.は，第68句法皇鞍馬落ちの冒頭「平家宇治瀬田の手退散の事」から，93字ばかりの内容（肥後守貞能が九州を討伐したが，東国・北国の源氏が鎮まらないこと）を持ちこみ，第五章段を語りおさめている。

天草版第五章段を要約すると，次のようである。まず国会本第65句玄昉の沙汰からは，「平家大敗の論」・「飛驒守景家思ひ死の事」のみを語り，続く第66句義仲山門牒状では，すべての内容をとりこんでいる。注目すべきは牒状（覚明牒状・山門牒状）の内容要約が，過不足無しというところである。さらに第67句平家一門願書では，平家がしたためた願書総字数924字ほどのものが，天草版では省略されて語られている。最後に第68句法皇鞍馬落ちの冒頭「平家宇治瀬田の手退散の事」から，肥後守貞能が九州を討伐したこと等を僅かに語り加え，第五章段をおえている。天草版平家第六章段からは，平家一門の動向を語る章段へと転換を図るその兆を第68句の冒頭93字ばかりを切りとることによってみせている。注目すべきは，牒状・願書の要約・省略にみられる天草版平家の編纂姿勢である。古典平家では牒状・願書の文体から，格調の高さ・文学的効果がみられるが，天草版平家では要約・省略され，関心の薄さが象徴的である。

B．登載章段の内容（いくつかの章段が連続して不登載）

A．天草版平家は古典平家の内容をそのままに持ちこんではいない　の観察結果から，天草版平家は古典平家の各章段から万遍なくとりあげているのではなく，編者の意図のもとに取捨選択が行なわれていることをみてきた。

さて登載章段の内容を吟味するために，天草版平家への登載章段名のみを整理して記すと，次のようになる。

天草版平家巻第三	古典平家（国立国会図書館蔵本）巻第六～巻第八		
第　一	第54句　義仲謀叛	第60句　城の四郎官途	
第　二	第61句　平家北国下向	第62句　火打合戦（前半）	
第　三	第62句　火打合戦	第63句　木曾の願書	
第　四	第64句　実盛		
第　五	第65句　玄昉の沙汰（前半）	第66句　義仲山門牒状	
	第67句　平家の一門願書	第68句　法皇鞍馬落ち（冒頭）	
第　六	第68句　法皇鞍馬落ち		
第　七	第69句　維盛都落ち		
第　八	第70句　平家一門都落ち		
第　九	第71句　四の宮即位	第72句　宇佐詣で	第73句　緒環（冒頭）
第　十	第73句　緒環	第74句　柳が浦落ち	
第十一	第76句　木曾猫間の対面		
第十二	第77句　水島合戦	第78句　瀬尾最後	
第十三	第79句　法住寺合戦	第80句　義経熱田の陣（冒頭）	

この巻第三全13章段は，語られる内容によって大きく三区分されていると言える。

第１区分（冒頭～第五章段まで）は，主として木曾義仲の動向（挙兵・進攻・勝利等）を語る部分。国会本10章段分を含む。

第２区分（第六章段～第十章段まで）は，主として平家の動向（平家一門都落ちの決意をし，京都を出，九州に下ったが，そこにも居られず屋島に仮の内裏を営む等）を語る部分。国会本８章段分を含む。

第３区分（第十一章段～第十三章段まで）は，再び木曾義仲が登場し，その動向を語る部分。国会本５章段分を含む。

第１区分の木曾義仲は，武人としての成果をあげ肯定的な側面をみせるが，第３区分では，否定的な側面をみせている。「義仲悪行」にみられる木曾は，遂に院の御所までを焼いてしまう。

したがって巻第三の主題は，次の２点と言える。

G　木曾義仲の動向（第１区分・第３区分）

H　平家一門の動向（第２区分）

木曾・平家を両立させながら語るのが天草版平家巻第三（全13章段）である。

このように全体を３区分仕立てにしている巻第三の構成上の特色を簡潔に記してみたい。

まず注目されるのは，第一章段である。

「木曾殿の由来と，平家に対して謀叛ををこされ，平家の味方の長茂と合戦してうち勝たれたこと」には，国会本からは第54句義仲謀叛・第60句城の四郎官途の２章段がとりこまれている。小題目からみると第54句義仲謀叛では，「城の太郎受領」・「石川城落去」が割愛されているが，第60句城の四郎官途では，すべての小題目がとりこまれている。比較的に省筆の少なさが注目される。割愛された「城の太郎受領」・「石川城落去」ともに，直接木曾義仲と拘わりを持つものではない。このように，国会本第54句義仲謀叛＋第60句城の四郎官途の２章段だけで成り立つ第一章段は，編者不干ハビヤンの大胆にして細微な構成力によるものである。木曾義仲に焦点を絞る筋立ての簡明さに，取捨選択の妙がある。巻第三の主題を明確に打ち出し，巻第三を象徴するものと言える。

次に注目されるのは，第十三章段である。

「木曾都にをいて狼藉をなすを法皇からして戒めさせられたれば，法皇のござる法住寺殿まで押し寄せて，合戦をし，御所を焼いたこと」には，国会本からは第79句法住寺合戦・第80句義経熱田の陣２章段がとりこまれている。小題目からみると第79句法住寺合戦では，「明雲僧正討死」・「仲兼馬かへ」・「信濃の次郎討死」・「刑部卿三位剝がれ」・「脩範にはか出家」が，直接拘わりを持つものではないとして割愛されている。注目されるのは第80句義経熱田の陣である。国会本第80句義経熱田の陣は，義仲悪行　公朝・時成熱田下向　同じく鎌倉へ参着　鼓判官鎌倉参上　義仲平家和議ならず　義仲大赦行はるる事　の６小題目から成り，これをもって国会本は巻第八が終る。一方天草版平家では，第十三章段に国会本第80句義経熱田の陣からもちこんだのは「義仲悪行」のみである。後の５小題目は巻第四第一章段（頼朝木曾が悪行を聞いてそれをしづむるために，代官として弟の範頼と，義経をのぼいてそれをしづめうとせらるるを聞いて，木曾平家と一味しようとつかいをたてたれども，平家同心せられなんだこと）へ移行している。法住寺合戦の後日譚相当部分をすべて巻第四第一章段へ移行させ，巻第三の最終章段には「義仲悪行」のみをとりこむという構成の組替えは，編者不干ハビヤンの編纂姿勢が窺われるところである。『天草版平家物語』の筋立ての単純化・内容把握の容易さには，外来宣教師（主としてポルトガル人）のための日本語テキストとしての適切さが注目される。

なお第２区分，第六章段～第十章段にわたる平家一門の都落，九州から屋島にいたるまでの内容は，程よくまとめられ，筋立てが容易に理解しやすくおさめられている。この筋立てに直接拘わりを持たないものは，有名な逸話であっても省略されている。

登載章段の中の不登載小題目を表にしてまとめておく。

天草版平家巻第三	登載小題目	不登載小題目
第一	第54句　義仲謀叛	城の太郎受領　石川城落去
第二	第61句　平家北国下向	経正竹生島参詣
第三	第63句　木曾の願書	覚明素生　願書　鳩の沙汰

第五	第65句　玄昉の沙汰	伊勢行幸　大宰少弐広嗣の乱　観音寺供養　兵乱の祈禱の事
	第67句　平家の一門願書	願書したためつかはす事
第六	第68句　法皇鞍馬落ち	春日大明神童子姿と現じ給ふ事
第七	第69句　維盛都落ち	経正御室へ参らるる事　青山の沙汰
第九	第72句　宇佐詣で	名虎相撲の事　惟高惟仁位争ひ　祈禱の事同じく競馬の事　伊勢公卿勅使　宇佐行幸
第十	第73句　緒環	あかがり大太
	第74句　柳が浦落ち	柳が浦内裏の事
第十三	第79句　法住寺合戦	明雲僧正討死　仲兼馬かへ　信濃の次郎討死　刑部卿三位剝がれ　脩範にはか出家
	第80句　義経熱田の陣	公卿・時成熱田下向　同じく鎌倉へ参着　鼓判官鎌倉参上　義仲平家和議ならず　義仲大赦行はるる事

天草版平家巻第三第十三章段の最後は，下記のように結ばれている。

まことに木曾が主上，法皇の分けをも知らいで，むさとした事を言うたことわをかしいことぢゃ。君子わ器物ならずとこそ言うに，ひとえに弓矢のことばかりに携わったことわあさましい儀ぢゃ。まことに木曾が悪行わ平家の驕った時のしわざにはるかましたと世上の取り沙汰でござった。

C．不登載章段の内容（天草版平家から排除された章段の共通性）

最初に登載章段の内容を吟味した際に，天草版平家への登載章段名のみを整理したのにならい，ここでは不登載章段の内容を吟味するために，天草版平家への不登載章段名をまず記すことにしたい。

天草版平家巻第三	古典平家（国立国会図書館蔵本）巻第六～巻第八		
第一	第51句　高倉の院崩御	第52句　紅葉の巻	第53句　葵の女御
	第55句　入道死去	第56句　祇園の女御	第57句　邦綱死去
	第58句　須俣川	第59句　城の四郎頓死	
第十	第75句　頼朝院宣申		

まったく古典平家から天草版平家へと持ちこまれなかったものの大部分が，第一章段にあることが注目される。第一章段は国会本から第54句義仲謀叛＋第60句城の四郎官途のみで成り立っている。国会本巻第六の大部分が割愛されていることになり，編纂者不干ハビヤンの大胆な構成力をみることができる。また第十章段に第75句頼朝院宣申が省略されているのも注目される。主題と拘わりを持たない内容は，切り捨てるという取捨選択によるところである。

さて連続して不登載章段の多い天草版平家第一章段（木曾殿の由来と，平家に対して謀叛をを

こされ，平家の味方の長茂と合戦してうち勝たれたこと）を，Cの例として，詳述したい。まず第一章段への不登載章段の内容を吟味するために，不登載章段名・その小題目名を記す。

天草版平家巻第三	不登載章段	不登載小題目
第一	第51句　高倉の院崩御	南都の僧綱解官の事　初音の僧正の沙汰　上皇御脳　上皇崩御　澄憲法印の歌
	第52句　紅葉の巻	紅葉の山の沙汰　紅葉をもって酒をあたたむる事　女房の装束奪ひ取らるる事　新しき装束賜はる事
	第53句　葵の女御	葵の前龍顔に咫尺の事　葵の女御死去　小督の殿の事　冷泉少将の歌　小督身を隠す　仲国に小督尋ね出だすべき下命　仲国嵯峨にさまよふ　想夫恋の琴の音　仲国小督問答　主上御感小督を御所へ迎ふ　小督出家　後白河院悲嘆
	第55句　入道死去	入道病ひの事　二位殿悪夢の事　入道遺言　入道死去　酒狂の人からめ捕らるる事　兵庫の築島
	第56句　祇園の女御	忠盛忍び御幸供養の事　忠盛祇園の女御下さるる事　紀伊の国糸我山歌の事　若君子息に定まる事　慈心坊閻魔の庁堀請　閻魔王清盛の慈恵　大僧正化身なるを告ぐ　流沙葱嶺の事　宗論　白河院高野御幸
	第57句　邦綱死去	邦綱死去　邦綱四条の内裏焼亡の時舁かるる事　邦綱人長の装束とり出ださるる事　如無僧都烏帽子とり出ださるる事　邦綱蒼梧の詩申さるる事　邦綱母北の方夢想
	第58句　須俣川	法皇環御　大仏殿事始め　美濃の国目代都へ注進の事　源氏合戦に利を失ふ事
	第59句　城の太郎頓死	しはがれ声　大赦　資賢今様　平家所願不成就の事　中宮建礼門院の院号　太白星の沙汰　山上洛中騒動

天草版平家には古典平家（国会本）巻第六（全10章段）中，第54句義仲謀叛・第60句城の四郎官途を除く8章段が不登載章段である。巻第六の大部分の量を割愛していて，古典平家の構成内容量との乖離が大きい。量的に大差が認められる両平家の質的な差異をみると，次のようにまとめることができる。箇条的に示すことにしたい。

①高倉院説話群：国会本51句高倉の院崩御にはじまる巻第六冒頭から，高倉院に拘わる52句紅葉の巻・53句葵の女御（含小督）のすべてが削除

②清盛説話群：55句入道死去（含築島）・56句祇園女御（含慈心坊）・57句邦綱死去のすべてが削除

清盛の壮絶な死は，『平家物語』にとっては重要な題材である。また『天草版平家物語』にとっても，異教である仏教的な視点からではなく，「をごりをきわめ，人をも人と想わぬようなるもの」としての清盛の「行儀の不法なことをのせたもの」として語るには「入道死去」の採択是非は興味のあるところであろう。

③第58句須俣川：須俣合戦（治承5年3月10日，知盛・清経・有盛，尾張須俣に源行家と戦い勝

つ）は，清盛亡き後，初めて源平が対峙し，平家が勝利をおさめた平家側にとっては大切な合戦を削除。

④第59句城の太郎頓死：城の太郎資長の怪死説などを削除

国会本巻第六に収められている上記の高倉院説話群：清盛説話群・須俣合戦および城の太郎資長の怪死説等は，古典平家の大河のうねりを支えるものである。しかし天草版平家では，義仲に注目を集める工夫として第54句義仲謀叛・第60句城の四郎官途のみをもって一章段を成している。不干ハビヤンの筋立ての単純化による大胆な改編が注目される。またこのようにして登場する義仲に対して，平家の「種々様々の位あつかいばかりをしていられまらしたわ，nambô nurui coto deua vorinaica ？」の一文の持つ空気が，平家の衰亡を窺わせるのに効果的である。古典平家には見られないこの一文を挿入させる不干ハビヤンの表現力をも注目しておきたい。

Ⅲ　総括

『天草版平家物語』（大英図書館蔵本・1592年＝文禄元年，イエズス会天草学林で刊行。不干ハビヤン編纂）の原名は，『NIFON NO COTOBA TO Historia uo narai Xiran to FOSSVRV FITO NO TAMENI XEVA NI YAVA RAGETARV FEIQE NO MONOGATARI』（日本のことばと Historia を習い知らんと欲する人のために世話にやわらげたる平家の物語）である。外来宣教師（主としてポルトガル人）のための日本語テキストであり，本文はポルトガル語式のローマ字綴によって表記されている。VM.（右馬の允）と QI.（喜一検校）の対話体によって「平家の由来が大略わかるように」語られてゆくものである。

さて本稿は，古典平家（国会本）と比較対照を行ない，『天草版平家物語』巻第三（全13章段）の構成を明らかにしようとするものである。天草版平家巻第三の内容は，国会本巻第六～巻第八に相当している。

両者の対校表を作り，その観察から次の３点に注目した。これは巻第一・巻第二にも共通する観察点である。

A　天草版平家は，古典平家の内容をそのままに持ち込んではいない（古典平家の各章段と１対１の関係を持っているわけではない）

B　登載章段の内容（いくつかの章段が連続して不登載）

C　不登載章段の内容（天草版平家から排除された章段群の共通性）

これらの注目点の要旨を，箇条書として記しておく。

1．天草版平家と古典平家（国会本）が１対１の関係を示すのは，4章段にすぎない。第四章段＝第64句実盛，第七章段＝第69句維盛都落ち，第八章段＝第70句平家一門都落ち，第十一章段＝第76句木曾猫間の対面　これらに準ずるものに第六章段＝第68句法皇鞍馬落ちがあるのみである。

他の章段は，国会本から天草版平家への編纂において何らかの改編が行なわれている。国会

本から最も多く一章段内に内容をとりこんでいるのは，天草版平家第五（木曾軍の評定をして比叡の山を語らわるれば，すなわち比叡の山も木曾にくみし，平家をそむいたこと：並びに平家西国の合戦にわ勝利を得られたこと）である。国会本から４章段とりこんでいる。

○注目すべきは，牒状・願書の要約・省略にみられる天草版平家の編纂姿勢である。古典平家では牒状・願書の文体から格調の高さ，文学的効果がみられるが，天草版平家では要約・省略され，関心の欠けている様子が注目される。：A

2．登載章段をみることによって『天草版平家物語』巻第三の構成が明白となる。巻第三は，全体を３区分仕立てにしている。

第１区分（第一章段～第五章段）は，主として木曾義仲の動向（挙兵・進攻・勝利等）を語る部分。国会本10章段分を含む。第１区分の義仲は，武人としての成果をあげ，肯定的な側面が語られる。

第２区分（第六章段～第十章段）は，主として平家一門の動向（平家一門都落ちの決意をし，九州に下ったが，そこにも居られず屋島に仮の内裏を営むこと等）を語る部分。国会本８章段分を含む。

第３区分（第十一章段～第十三章段）は，再び木曾義仲が登場し，その動向を語る部分。国会本５章段分を含む。第３区分の義仲は，否定的な側面をみせる。「義仲悪行」にみられる木曾は，遂に院の御所までを焼いてしまう。したがって巻第三の主題は，次の２点である。

G　木曾義仲の動向（第１区分・第３区分）

H　平家一門の動向（第２区分）

○第一章段・第十三章段の構成の特徴

第54句義仲謀叛＋第60句城の四郎官途で成り立つ第一章段は，編者不干ハビヤンの大胆にして細微な構成力が注目されるところである。義仲に焦点を絞る筋立ての簡明さに，取捨選択の妙がある。

国会本から第79句法住寺合戦＋第80句義経熱田の陣がとりこまれているのが，天草版平家第十三章段（木曾都にをいて狼藉をなすを法皇からして戒めさせられたれば，法皇のござる法住寺殿まで押し寄せて，合戦をし，御所を焼いたこと）である。国会本は第80句をもって巻第八を終るが，天草版平家の第十三章段にもちこまれた第80句は，「義仲悪行」のみである。したがって法住寺合戦の後日譚相当部分は，巻第四第一章段へ移行させ，巻第三の最終章段に「義仲悪行」のみをとりこむという構成の組替えは，編者不干ハビヤンの編纂姿勢が窺われるところである。『天草版平家物語』の筋立ての単純化･内容把握の容易さは，外来宣教師のための日本語テキストとして最適である。：B

3．不登載章段の扱いにも，不干ハビヤンの大胆さがみられる。第一章段について記す。

国会本巻第六冒頭第51句高倉の院崩御に続き，第52句紅葉の巻　第53句葵の女御と，高倉院追悼説話群を省略

第55句入道死去　第56句祇園の女御　第57句国綱死去と連続する清盛追悼説話群を省略　古典平家にとって重要な位置を占める「入道死去」をすべて割愛し，義仲の旗挙げから横田河原合戦での大勝まで徹底した改編が行なわれている。ハビヤンの意図が鮮明である。

第58句須俣川の割愛も注目される。須俣合戦（治承５年３月10日　知盛・清経・有盛が尾張須俣に源行家と戦い勝つ）は，清盛亡き後始めて平氏軍が源氏軍に勝利した合戦である。第60句において横田河原合戦（城の四郎長茂を木曾が光盛の武略により敗る）が省筆されず天草版平家にとりこまれているのとは，対照的である。この横田河原合戦に勝利をおさめた木曾義仲は，北国の雄となる。

不登載章段の夥しい量・質は，木曾義仲と直接拘わりを持たないものとして排除した結果である。したがって『天草版平家物語』巻第三第一章段は，編纂者不干ハビヤンの意図的な改編による成果がみられる章段と言える。：C

4．不干ハビヤンによる古典平家から天草版平家への内容の組替えは所所にみられるが，改編による構成において最も威力を発揮するのが巻第三第一章段および第十三章段である。巻第三の冒頭第一章段を，義仲謀叛をもって飾る大胆な手法は，巻第三の主題を明確に打ち出し，巻第三を象徴するものと言える。

最終章段第十三章段が国会本から「義仲悪行」のみを終末部にとりこみ第十三章段を終えるという構成の組替えは，巻第四第一章段（頼朝木曾が悪行を聞いてそれをしづむるために，代官として弟の範頼と，義経をのぼいてそれをしづめうとせらるるを聞いて，木曾平家と一味をしようとつかいをたてたれども，平家同心せられなんだこと）への新たな展開を呼びこむための改編である。『天草版平家物語』巻第三は，編纂者不干ハビヤンの大胆さ･緻密さに裏付けられた構成により成り立つものと言える。

参考図書

『天草版平家物語対照本文及び総索引　本文篇』江口正弘　明治書院
新潮日本古典集成『平家物語』水原一校注　新潮社
『天草本平家物語の語法の研究』鎌田廣夫　おうふう
『平家物語全注釈』冨倉徳次郎　角川書店
『天草版平家物語私考』市井外喜子　新典社